群馬の空調設備工事ヤマト
宮城・大崎に営業所
東北に進出

群馬県を地盤とする空調設備工事などのヤマトは7月下旬に宮城県大崎市に東北地方で初の拠点を開設する。省エネなど得意とする環境技術を活用し、現地の建設会社と提携してビルの改修需要を開拓する。公共事業の減少に加え、民間設備投資も伸び悩み、地盤としてきた関東地方でも厳しい状況が続く。受注競争が激化するなか、東北に営業エリアを広げることで、勝ち残りを目指す。

21日に宮城県北部の大崎市に「東北営業所」を開設する。主に東北地方にある延べ床面積3300～1万6500平方メートルの中型ビルの改修工事を中心に受注獲得を狙う。

割安でつくっ用する備やフを抑え凍ショ境に関が必要に開拓・東北設業者委託や材料証を担の営業地域では原則自社で施工を手掛けてきたが、東北は営業基盤が無く人員の限界もあるため、「新しいビジネスモデルを実験する」（新井孝雄社長）という。東北営業所の初年度の売り上げ目標は3億円。

7/14 日経新聞

個別指導塾「アップル」映像授業、9月開始

個別指導塾「アップル」を展開するセレクティー（仙台市、畠山明社長）は映像配信を受けた授業を9月に始める。各教室にパソコンを設置し、生徒が受講したい講座を呼び出す。小学校から高校までの各科目をそろえ、1300講座以上を受講できるようにする。講師によるマンツーマン指導と組み合わせて利用してもらう。

仙台市内の4教室で導入する。コンテンツは市進ホールディングス傘下の市進ウイングネット（東京・文京）から提供を受ける。

料金は検討中だが、個別指導の半額以下とする方針。小学生が週1回45分間の個別指導を受けると月額1万500円かかるが、このうち数回を映像授業に振り替えれば、受講者は指導料を抑えることができる。

従来の個別指導と組み合わせることで、映像授業を受けた生徒の質問に個別指導の講師が答えるような利用ができるとしている。

岐路の東北
第5部 原発立圏 ④

東北には原子力産業が集積する。これらをどう発展させ、地域経済の浮揚に役立てるか。受け入れ自治体トップと学識経験者に聞いた。

原燃なければ限界集落

六ケ所村長
古川 健治氏

六ケ所村生まれ、日大卒。村教育長を含めて教員生活を送った後、2002年に初当選。原子力と共存する村づくりを進める。兄の伊勢松氏もかつて村長を務めた。76歳。

——日本原燃を受け入れたことへの評価は。

「貧しかった村が、今は（国から地方交付税を受けない）不交付団体だ。発展の基礎になった。重化学工業地帯をつくるむつ小川原開発計画は石油ショックで中断した。原燃が来なければ、村全体が限界集落のようになっていたはずだ」

「住民は約1万1200人いるが、昼間は三沢市などから通勤して来る人で1万5000人くらいに増える。働き口が多いからだ。（3選を果たした）6月の村長選では私が5106票を得て、（反核燃を訴えた）相手候補は274票。住民にもメリットを理解してもらっていると思う」

——豊かな財政力をどう生かす。

「原燃関連の税収や、国から受け取る電源立地交付金だけに頼ることはできない。人材基金を作るなど教育と子育てに力を入れ、将来に向けて投資している。産業の質を高める財源に充て、『1次産業と共生するエネルギーの村』を目指す」

「漁業・畜産施設の整備と並行して、風力発電所や核融合の研究センターを誘致した。インターナショナルスクールも作った。過大投資という人もいるが、家族で暮らせないと優秀な外国人研究者は来ない。今年は各施設を見学して回る次世代エネルギーパークができ、夏にはスマートグリッド（次世代送電網）実験も始まる」

——再処理工場の完成が遅れている。

「安全がすべての基本だ。再処理工場は国内初の事業。原燃は一歩一歩取り組んでほしい。また国は（放射性廃棄物の）最終処分を国民に理解してもらえるよう先頭に立って取り組むべきだ」

「原子力発電所の導入は世界の流れだ。原発を安全に動かす人材を育成する国際拠点を六ケ所村に作ることを国へ提案したい。海外への原発売り込みにも役立つはずだ」

学生に教育、将来の芽に

福島高専教授
佐東 信司氏

東京大学で核融合炉材料を研究。1997年から福島工業高等専門学校の教授。2009年度まで副校長を務め、ものづくりに関する教育などに取り組んだ。62歳。

——原子力に関する教育に力を入れている。

「2009年度には東京電力の福島第二原子力発電所で当直研修を体験したり、京都大学の研究所で核融合プラズマ技術について学ぶ」が参加した。今年も8～9月に35人の学生が参加し、東電や東北電力、地元自治体にも受け入れを頼み、電力交付金による地域振興など原子力行政の開発や教育に取り組む学生の関心は高く、その育成を本格化させている。

就職者は毎年数人程度だったが、今年4月は16人が就職した」

——地元に原発があるという立地をどう生かしていくか。

「原発がある地域としてプルサーマルと地元の関連をまとめる研究も考えている。原発建設当初べられたらおもしろい。近い将来に『エネルギーコース』を新設することも計画している。原子力を中心に太陽光や風力などエネルギー全般を扱う内容とし、本校の教育の特色としたい」

——東北は原子力施設が多い。どう向き合っていくべきか。

「安全・安心の取り組みなしにプルサーマルとはどういう仕組みなのか理解を深めたり、原発による地域経済や雇用への影響を考えたりすることも大事だろう。建設したからには原発と地元がウィン・ウィンとなる関係を目指すべきだ」

——第5部おわり